

# 地域の「対外的境界」と「内なる境界」 —東欧と中国語圏をめぐる研究者の対話—



上写真：第2セッションの報告者  
下写真：総合討論の様子

企画責任者：香坂直樹(跡見学園女子大学・兼任講師)  
共催：北海道大学スラブ研究センターGCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブユーラシアと世界」  
共催：エスニック・マイノリティ研究会 / 後援：東京外国語大学海外事情研究所

## 1. 企画の意図

- 様々な「境界」の可変性や権力関係が「境界」に与える影響という認識を踏まえ、近現代の東欧で進行した「国民化」の際に、各種の「境界」がどのように作用したのかを考察する。
- 上記の内容の報告に対し、中国語圏を扱う研究者が自らの研究成果を基にコメントし、西欧の影響下で国民化を進めたという共通性をもつ、二つの地域の事例の類似性と相違を見出し、議論を進める。

## 2. 各セッションタイトル、報告者・コメンテーター(所属・敬称略)

- 第1セッション：「対外的境界」の形成と再編—集団の境界概念を構成する論理  
報告者：森下嘉之、香坂直樹、中澤拓哉 / コメンテーター：茂木敏夫、小島敬裕
- 第2セッション：「内なる境界」の解消と再構築—社会統合の両側面  
報告者：姉川雄大、山本明代、遠藤嘉広 / コメンテーター：小林亮介、土肥歩
- 第3セッション：「越境者」の境界意識—自己意識と境界との関係  
報告者：辻河典子、鈴木珠美、井上暁子 / コメンテーター：松村智雄、松岡格
- 総合討論 問題提起：持田洋平、山崎典子

## 3. 主な議論・論点

- 各セッションの報告や議論では“nation”や“ethnicity”、“minority”の定義や実態に関心が集まった。これに対し、これらの概念はあくまでも分析概念であること、そして、本来は紛争を先鋭化させないための装置として考案されたが、使用されているうちに逆に紛争を惹起しかねない概念に転化した歴史的背景に留意すべきであること、またこのことを繰り返すことが、地域研究者の役割であるとの意見が出された。
- 「境界」について境界を形成する主体に注目し、誰が何のために境界を形成するのかを考察するべき、そして、境界を挟んだ集団間の関係、そしてある境界が「意識される事例／意識されない事例」の相違にもより注目すべきとの意見が出された。
- また、「境界形成」(bordering)は日常的な行為を通じて緩慢に進展する長期的な過程であり、この過程を丁寧に追うことが歴史研究者が行う境界研究に求められるとの意見が出された。

## 4. ワークショップの結論・次の課題

- 境界研究では、ある境界を所与の前提とする既存の研究枠組みに捕われない視点から、特定の人々・集団の恣意的な行為を経て境界が形成され、意識される長期的な過程に注目すべきである。
  - その際、(1)境界を形成する権力の担い手の性格・意図、(2)境界を設定する集団と「他者」として境界外に置かれる集団との関係(寛容・共存から排除・敵視にいたるまでの揺れ幅が存在)に注目する必要がある。
- 「境界を設定する／設定される側」(＝「枠を作る側／枠外に置かれる側」という関係を切り口に、ethnic minorityと境界との関係を扱うことが、エスニック・マイノリティ研究会の次の課題となるのではないかと。